



神奈川県立歴史博物館

だより

令和元年5月30日発行
通巻211号

MAY. 2019 Vol.25 No.

1

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History



【目次】

- 特別展「北からの開国」の見どころ……………2
- 「桜井家文書」の修理報告と公開に向けて……6
- THE けんぱく PUNCH
博物館をめぐる！ミュージアム・ミッション…8

特別展「北からの開国」の見どころ

嶋村 元宏

はじめに

江戸の日本橋より唐、阿蘭陀、迄境なしの水路也
この有名な言葉は、寛政3（1791）年に仙台藩士・林子平によって著された『海国兵談』の一節です。

江戸の日本橋から中国やオランダまで切れ目なく水路が続いているようなものであると、子平は言っています。これは、単に海を通じて日本と異国とが繋がっているということだけではありません。この一文のまえには、「当時長崎に嚴重に石火矢の備有て却て安房、相模の海港に其備なし、此事甚不審」と、長崎は防備が嚴重であるのに対し、將軍のお膝元である江戸湾を取り巻く房総半島側の安房国や三浦半島側の相模国周辺の防備がなされていないことをいぶかしています（写真1-①▼の部分）。

子平は日本が「地続の隣国なくして四方皆海に沿る国」（写真1-②▼の部分）、すなわち「海国」であることから、中国とは異なる日本独自の防衛論が必要であるとの立場から本書を執筆しますが、これはオランダ商館長から、ロシアが日本へ接近しているという情報に接し、危機感を抱いたことによるものでした。事実、『海国兵談』が出版された翌年の寛政4年10月、ロシアの女帝エカチェリーナの命を受けたアダム・ラクスマンが、伊勢の漂流民大黒屋光太夫の送還を理由に、当時蝦夷地と呼ばれていた北海道の根室に來航し、日本との通商を要求します。多くの方は、アメリカがはじめて日本に対して開国・通商を要求したものと考えているかもしれませんが、実はペリー來航よりも60年以上前にロシアが開国・通商を求めていたのです。

当時老中であった松平定信は、海防態勢の不備を指摘した『海国兵談』を、幕政を批判したものとして発禁処分とし、版木を没収しましたが、ラクスマンの來航を目の当たりにすることとなります。「鎖国」から開国へという歴史の大きな流れは、このロシアの接近により始まったと言えるでしょう。

展覧会の趣旨

17世紀半ばに、禁教を主たる目的としてスペイン、ポルトガルの來航ならびに日本人の海外渡航を禁じて以来、四方を海に囲まれた海国日本は、海が自然の要害となったことから、容易に異国船が接近できませんでした。その結果、海外における戦争や紛争の影響を受けることなく「鎖国」政策による平和を享受することができました。しかし、18世紀に入ると、航海術や造船技術の発達により、異国船が日本近海に頻繁にその姿を現すようになります。海は異国と日本とを結ぶ路（みち）となったのです。そのような状況下において、日本と初の条約を締結したペリーの來航より以上前の寛政3（1792）年、ロシアはラクスマンを派遣し江戸幕府へ開国・通商を要求してきたのです。

海防態勢の不備に危機を募らせた幕府は、文化元（1804）年のレザノフ來航や文化5（1808）年のフェートン号事件などの対外的危機が相次いだことから、全国的な海防態勢の強化を図りました。総延長約430キロの海岸線を有する神奈川県においても、三浦半島を中心に多くの台場が築かれました。そこでこの展覧会では、自然の要害として機能していた海が異国と日本とをつなぐ路へと、その役割が変容したことを踏まえつつ、アメリカに先立ち北から開国

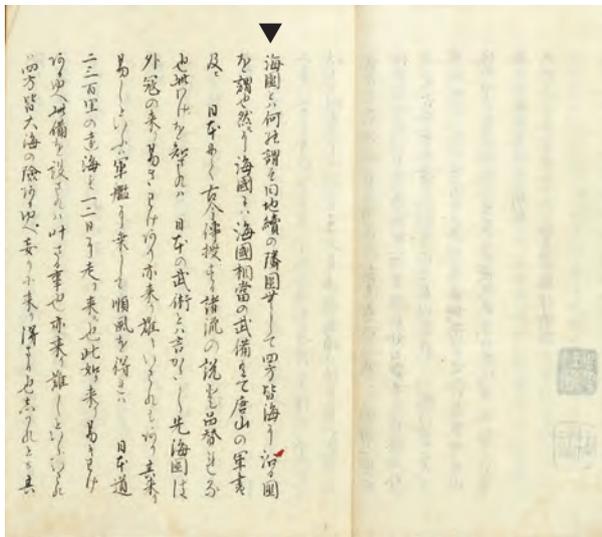
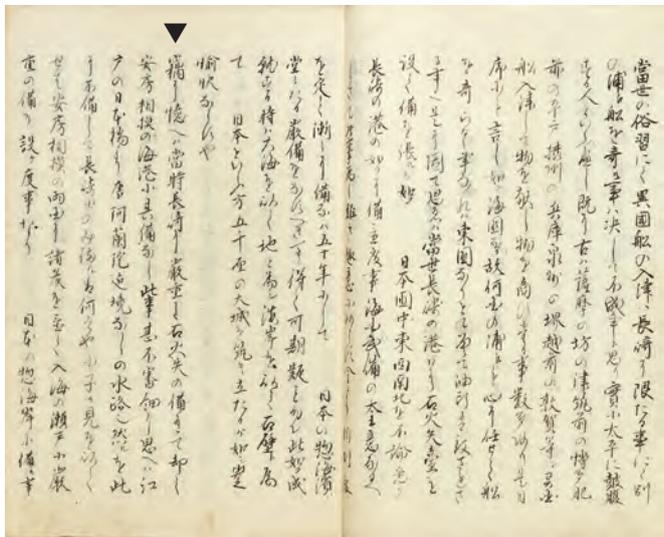


写真1-②



【写真1 林子平『海国兵談』真田宝物館所蔵】

写真1-①



【写真3 『蝦夷國全圖』紙本彩色、東北大学附属図書館】



【写真2 『夷酋列像粉本』紙本墨書、江戸時代、函館市中央図書館、北海道指定文化財】

を求めたロシアとの関係を浮き彫りにするとともに、「鎖国」を維持するために構築された海防態勢を紹介することで、開国史の新たな視点を提供します。

構成

今回の展示は、

- I 北の海へのまなざし
- II 海を越えて—ひと・モノ・情報—
- III 海を巡る—海防巡見報告—
- IV 海を守る

の大きく4つの章からなります。以下、それぞれの内容と主要な展示資料について紹介します。

I. 北の海へのまなざし

18世紀半ば以降、北の海から接近してくるロシアを強く意識し、はやくから蝦夷地や海防について論じ

たのは仙台藩の工藤平助や林子平などの蘭学者や蘭学者と交友を持つ知識人でした。北方における地理的発見の状況を踏まえ、ラクスマン来航前後における幕府や知識人たちが北の海へいかなるまなざしを注いでいたのか、また、蘭学者としても著名な古河藩家老鷹見泉石などのロシア認識についても紹介します。



【写真4 『鷹見泉石像』模本、古河歴史博物館、古河市指定文化財】



【写真5『魯西亜之図写 五様 蕉亭藏（大黒屋光太夫）』福山市歴史資料室、東京阿部家文書の内】

また、ラクスマン来航後、ロシアとの緊張関係が高まりを見せると、松前藩の支配地だった蝦夷地を天領とし、近藤重蔵や間宮林蔵に蝦夷地調査をおこなわせています。現在いずれも国指定重要文化財となっている彼らの遺した資料により、蝦夷地の位置づけについても確認します。

II. 海を越えて一人・もの・情報—

ラクスマンは来航に際し、ロシアに滞在していた大黒屋光太夫などの漂流民を連れ帰ります。そして光太夫は、ロシアから持ち帰ったものやロシア国内の様子を人々へ伝えます。幕府の医官で蘭学者でもあった桂川甫周が大黒屋光太夫を尋問しまとめた『北槎聞略』（寛政5年、国立公文書館、国重文）や鷹見泉石が光太夫から借り受けて筆写した『魯西亜言語集』【写真6】などの資料から知ることができるよう。

また、ラクスマン同様、文化元（1804）年のレザノフ来航に関する情報も、仙台の漂流民津太夫を事情聴取した仙台藩蘭学者・大槻玄沢によって『環海異聞』【写真7】としてまとめられます。

このほか、ロシアに関心を持ち、さまざまなチャンネルを駆使してロシア情報を入手した鷹見泉石のコレ

クションも紹介します。

III. 海を巡る—海防巡見報告書—

たびかさなる異国船の来航に危機感を募らせた江戸幕府は、老中あるいは勘定奉行などを海岸防御御用掛（海防掛）に任じ、江戸湾周辺の防備状況の検視を命じます。その初代となったのは、ラクスマン来航時の老中であった松平定信です。

このコーナーでは、主に、ラクスマンの来航を契機に寛政4（1793）年海防掛老中として伊豆・相模周辺を巡検した松平定信や、嘉永3年に海防掛に任命された勘定奉行石川政平や西丸留守居筒井政憲がおこなった海防巡見にかかわる報告書である『近海御備向見分御用留』や筒井が唐中阿部正弘へ送ったとされる報告図『近海見分之図』を紹介することで、当時の海防状況を紹介します。

IV. 海を守る

ロシア船の来航を機に始まった、全国的な海防態勢の整備により、各地に台場が築かれます。神奈川県域には、三浦半島のほか八王子山（小動岬）、小田原海岸、真鶴岬にも台場が設置されています。



【写真6 鷹見泉石自筆『魯西亜国字学』古河歴史博物館、国重文「鷹見泉石関係資料」の内】



【写真7 大概玄沢自筆『環海異聞』宮城県図書館、宮城県指定有形文化財】

三浦半島の警衛は、浦賀奉行のもと会津藩によりはじめられ、その後川越藩に交代しました。さらに、弘化4年には川越藩に加え彦根藩も加わり、二藩態勢でペリー来航時までおこなわれました。そのため、三浦半島の海防状況を示す資料は、川越藩と彦根藩に遺されており、それらの資料を紹介することで、三浦半島でどのように海岸防禦をおこなっていたのかを確認します。

また、「鎖国」を維持するために多くの知識人から出された多種多様な海防論を紹介することで、当時の人々の海防認識についてもあわせて紹介します。

むすび

ペリー来航より60年以上前に、突然北の海にその姿を現した「黒船」の来航が、平和で安定した社会であった日本に激震を走らせることとなります。「鎖国」を維持するためには、現状からの変化を容認することはできません。

水戸藩儒者会沢正志齋は、文政8（1825）年、前年にイギリス人が水戸藩領である常陸国大津浜へ上陸した事件を探索したことを契機に、『新論』を水戸藩主徳川齊脩へ上呈します。『新論』は尊王攘夷論を体系化した書として著名ですが、その中で、正志齋は中国の兵法書である『孫子』を引き、

その来たらざるを待むことなく、吾の以てこれを待つことあるを待む。その攻めざるを待むことなく、吾の攻むべからざるを待むなり。

と、異国船の来航や攻撃がないことを期待するのではなく、来航したり攻撃したりしないよう防備を十分にすべきであることを主張します。

しかし、日本への来航や攻撃を思いとどまらせるだけの海防態勢を、四方を海に囲まれ、約3万キロに

およぶ海岸線を有する日本列島に構築することは、決して容易なことではなかったのです。

ペリー来航を迎え、強硬な攘夷を実行することでかえって幕府の存続をさせ脅かされる状況になると、「鎖国」維持を希望しながらも、避戦のために限定的な開国へと政策の変更をみせます。そして、最終的には、三浦半島の海防を担った彦根藩主であった大老井伊直弼により日米修好通商条約の調印が決定され、諸外国との貿易がはじまりました。

井伊直弼は、ペリーが幕府へ捧呈したアメリカ大統領国書への対応案として、積極的通商論を唱えたことで有名ですが、避戦のために開国・通商そのものを目的としていたわけではありません。

一般には、開国・通商と鎖国・攘夷とは二項対立的に論じられますが、決して対立するものではありません。井伊直弼も述べていますが、国力を増すために積極的に貿易を主張しています。つまり、日本の独立を守るためには開国・通商することで、富国強兵を目指すべきであることを論じたのです。

横浜開港の恩人として掃部山公園に銅像が建立されて110年目となる今年、開港に至るまでの歴史を北の海からの視点で是非お楽しみください。

（しまむら もとひろ・主任学芸員）



特別展

北からの開国

—海がまもり、海がつないだ日本—

会期：2019年7月13日（土）～9月1日（日）

休館日：月曜日（ただし7月15日、8月12日は開館）

8月6日（火）（常設展は観覧可能）

※会期中、一部の作品・資料の展示替がございます。

2019年度特別展のお知らせ

時宗二祖上人七百年御遠忌記念

真教と時衆

2019年10月5日（土）～11月10日（日）

掃部山銅像建立110年

井伊直弼と横浜

2020年2月8日（土）～3月22日（日）

「桜井家文書」の修理報告と公開に向けて

渡邊 浩貴

当館では、2017年度から2018年度までの2カ年にわたり、館蔵資料「桜井家文書」の近世文書分19通の修理を行ってきました。ここでは、同文書群の修理作業の概要を述べつつ修理完了を機に今秋開催するコレクション展『「桜井家文書」—戦国武士がみた戦争と平和—』の内容を少しだけご紹介していきます。

修理作業の概要—史料の所見と修理方針—

当館所蔵の「桜井家文書」は、戦国大名北条氏に仕えた戦国期の武士桜井氏に伝来した家伝文書です。30通の古文書から構成される本文書群は、戦国時代の末期から江戸時代の初頭という戦乱の時代を駆け抜けた、桜井氏という一武士の歩んだ歴史を私たちに示してくれています。

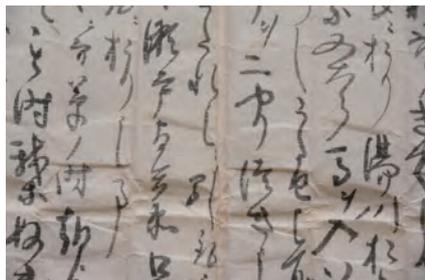
さて、「桜井家文書」には、後北条氏が発給した中世文書分11通に加え、桜井氏が新たに仕えた結城秀康や越前北ノ庄（福井）藩の二代藩主松平忠直（結城秀康息子）が発給した文書など、近世文書分19通が現在伝来しています。中世文書分については、すでに修理が実施済みとなっており、現在は一紙毎に帖紙たとうがみに収められています。一方、近世文書分をみますと、保存状態は良好ではあるのですが、全体的に経年劣化による本紙の毛羽立ちが目立ち、細かいながらも虫損や欠損が認められます。

また、三紙を継いで書き上げられた「我等はしりめくり之覚」は、後世の修理段階で、剥がれた紙継の補修が施されていましたが、その際に墨書にかかるように紙を継いでしまい、文字判読への支障やさらなる劣化を招く恐れがありました（写真①②）。この文書は、「桜井家文書」のほとんどが後北条氏・結城氏などの上部権力からの発給文書で構成されるなか、桜井武兵

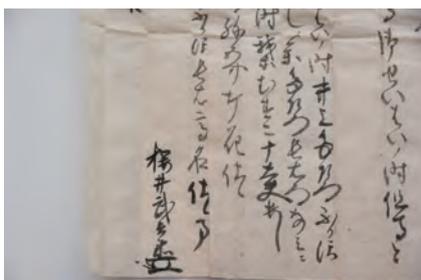
衛が自身の合戦での戦功を列記したもので、桜井氏自身が記した唯一の貴重な文書なのです。これら近世文書分の今後の経年劣化を抑制し、展示等の博物館事業への一層の活用を図るために、修理を実施することになったのです。

修理作業では、虫損部や欠損部、紙継目の補修・修正を施しつつ、当初の状態を損なわないことを重視しました。古文書の修理では、本来の折筋や皺などを伸ばすため、薄い裏打ち紙を用いて、本紙に裏打ちを施すことが一般的です。今回の修理でも、同様に裏打ちを施す予定でしたが、どんなに薄い裏打ち紙を使用しても、本紙が引き延ばされ過ぎてしまい、本来あった本紙の折筋が見えなくなっていました。今日の手紙類もそうですが、中世の文書は、本紙に墨書で必要事項を記したのちに、紙を折って封紙ふうし（今でいうところの「封筒」）に包んで渡します。こうして文書に付けられた折筋は、現在の私たちの感覚からすると一見何でもないようなもののように思われてしまいます。ですが、様々な古文書の折筋に着目して見ていくと、折り目の粗密や折り方の順番の違い、果ては宛名に書かれた相手の名前に折筋がかからないような配慮まで、実に多様な情報を私たちに提供してくれるのです。文書に残された折筋に注目することは、これまで記された文字を読むことに一生懸命になりがちだった古文書の見方に、今度は文書そのものを「モノ」として楽しむ見方を、私たちに提供してくれるのです。

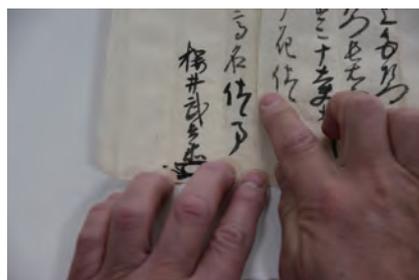
以上の担当者の所見を踏まえて、今回の修理では基本的には裏打ちを施すことはせず、本紙への水張りのみを行い、本紙に強く残った折り目を落ち着かせて本来の折筋を目視できるようにしました。「桜井家文書」所収の文書はいずれも料紙が厚手の楮紙であるため、



写真① 「我等はしりめくり之覚」の紙継目の修理前状態 墨書に継目がかかり、無理な貼り継により本紙へ歪みが生じている。



写真② 修理前の「覚書」



写真③ 「覚書」の継ぎ目の修正

耐久性については問題ありません。また一紙ではなく、三紙にわたる「松平忠直黒印状」と「我等はしりめくり之覚」については、前者は紙継目裏に黒印が捺されているため、軸装はせずに本紙に水張りのみを施して、中性紙の紙官による仮巻装としました。これは、軸装によって紙継目裏の黒印が目視できなくなることを避けるためです。後者については、紙継目を本来のものに修正した上で裏打ちを施して卷子装に装幀しました(写真③④)。その理由は以下の二点にあります。まず一点目は、この文書が他のものと異なり薄手の緒紙であるという史料の料紙の状態を考慮したため。二点目は、文書自体の史料学的価値とそれに起因する展示頻度の増加に耐えうるものとするためです。文書群のなかで唯一の桜井氏作成の文書であり、かつこの覚書に列記された桜井武兵衛の戦功や合戦状況を、同文書群にある他の発給文書から裏付けることができます。同時代の武士たちの戦功記録類や伝来状況と比較すると、その史料学的価値は極めて高く、それゆえ、常設展示や特別展示、調査研究での今後のより一層の利用が見込まれるのです。

文化財の修理にあたっては、現状の資料状態を改善し、今後の劣化を防止することがまず要求されます。さらに、資料そのものが有している資料的・研究史的意義なども踏まえた上で、適切な修理方針を立てて、修理専門業者と協議を行いつつ進めていくことが肝要です。資料に対して、「学芸員」としてモノを見て扱う姿勢と、その前提となる「研究者」として常に研究史に位置づけ意義を問い続ける姿勢の両方が不可欠なのです。

コレクション展 『桜井家文書』

— 戦国武士がみた戦争と平和 —

修理報告のみで紙幅が尽きようとしているため、ここではほんの少しだけ、「桜井家文書」の修理完成を記念して実施する、今秋のコレクション展の宣伝をさせていただきます。

当館の中世歴史分野では、2018年の再開館以来、館蔵の文書群毎に常設展示室の展示替えやトピック展を行うことを基本方針としてきました。その理由は、各文書群におけるコレクション形成のあらましを提示するため、ということだけを目的としているわけではありません。文書群のなかで各古文書を分析して展示することで、一つ一つの文書が文書群という「まとまり」のなかでどのような位置づけを歴史的に与えられてきたのか、伝来したものと伝来しなかったものの違

いはいったい何なのか、ということを考えるためなのです。

戦国時代という大規模戦争が常態化した時代が終焉することは、同時に多くの牢人を社会に生み出すこととなります。後北条氏に仕えた桜井氏も例外ではありませんでした。牢人の出現と、新たな仕官先を得て定着していくという動向は、近世社会における武士身分の確立を象徴する社会現象と言えるでしょう。これは中世社会に遍在する暴力と武力がすべて系列化され、そして平和のなかに押さえ込まれていくプロセスでもあるのです。今秋のコレクション展では、かかる時代の転換期にあつて、牢人となった武士桜井氏がどのように生きのび、そして平和を受け入れていったのか、その生き方を「桜井家文書」という文書群を紐解くことで示していきたいと思えます。

(わたなべ ひろき・当館学芸員)



写真④「覚書」への裏打ち作業



写真⑤「松平忠直黒印状」への水張り作業

(写真①～⑤ 画像提供：小野瀬修雅堂)

コレクション展

『桜井家文書』

— 戦国武士がみた戦争と平和 —

会 期:2019年11月19日(火)～12月22日(日)
休館日:月曜日、11月26日(火)



間もなく暑い夏がやってくるの！子ども達諸君、夏休みの予定は決まったか。
この夏、博物館のおすすめイベントを営業部長のワターシ、パンチの守が紹介するぞ。



博物館をめぐる！ミュージアム・ミッション

皆は、当館の所在している横浜が、多くの博物館（ミュージアム）が集まるエリアだということを知っておるかな。歩いて回れるみなとみらい・関内・山手地区には、歴史・美術・文学等々、分野も特徴も異なる様々な博物館が近接しておるのじゃ。そんな「博物館のまち横浜」を、博物館のミッションをクリアしながら回る、ミュージアム・ミッションをこの夏開催するぞ。

それぞれの博物館から出されるミッションは様々で、展示をよ〜く見ないとクリアできないものもあるから、チャレンジしなから博物館を回れば、君も博物館マスターになれるかも知れんぞ。

さらに、ミッションをクリアした者にはプレゼントを用意しておるぞ。プレゼントの目玉は野毛山動物園裏側



見学ツアーじゃ！動物園の病院や台所、動物のお部屋など、普段は見られないものを間近に見られるチャンスじゃから、是非ミッションにチャレンジして応募して欲しいのじゃ。ミュージアム・ミッションの開催は7/20（土）～8/31（土）。夏休み、博物館では子ども達諸君の挑戦を待っておるぞ！

◀ミュージアム・ミッション 2018 野毛山動物園裏側見学ツアーの様子

ミュージアム・ミッションとは？

博物館ってどんなところ？ どんなことやっているの？ をみなさんに知ってもらうため、2003年にスタートした、夏休みの子ども向けイベントなのじゃ。17回目の今年、新しく野毛山動物園が加わったぞ！

（聞き手：濱本明海／はまもとあけみ・非常勤学芸員）



まだまだおすすめ、夏の博物館！

特別展「北からの開国一海がまもり、海が繋がった日本一」会期：7月13日（土）～9月1日（日）では、よく見て、楽しんで、海を学ぶ、子ども展示を行うぞ。博物館で君の「ふしぎ」と「なるほど」を見つけよう！

